

言葉のちから

ひまわり学園長 藤井 康成

「寄り添い、生活環境を整え、受容・共感し、愛情を持って励ますこと」

ひまわり学園では、今年度、子ども家庭福祉において大切にしている「子ども最善の利益」のために、この「言葉」をはじめ四点を想いとして掲げた。

全ての職員が、子どもたちや保護者、関係機関、そして職員同士に対して同じ方向で歩んでいくために。

新年度に向けた会議の場で、この言葉は紡ぎ出された。この春から就任している副園長、三人のマネージャ、事務や栄養士などとベテランから中堅と多様であるが、それぞれの想いを挙げ、ホワイトボードに書き出し、二月下旬から三月下旬にかけて、複数回に亘り練り上げたのだ。

これらを掲げてから九ヶ月が経った。尚早かもしれないが、少しだけ振り返ってみたい。

ひまわり学園は、札幌市にある社会福祉法人麦の子会と日本ボーイズタウンプログラム振興機構代表理事である堀健一先生からオンラインで、CSP(ボーイズタウン・コモンセンスペアレンティンク)のコンサルティングを受け、引き続き

き実践を積んでいる。

そして、集団での生活となってしまうが、一人ひとりの子どもたちの特性や発達、相性を踏まえ六寮からなるユニットでの「発達支援」に取り組んでいる。この一二月には、新たに二名が入所となり四四名となった。

ライフステージに応じた進路を迎える子どもたちも多い。それぞれの意思を尊重し、学校や関係機関と連携した「自立支援」は、成人期のサービスへの移行のために進路担当の職員がつながりを造る。成人期を迎えようとしていた二名が、今夏、障がい者支援施設に移行。そして来春には、企業からの内定を受け、社会人として一步を踏み出そうとする子どももいる。朗報という形で進路が決まってきたている。

「社会的養護」も学園の特徴である。入所に至った子どもたちの複合的な事情や背景は、道内の他施設よりも群を抜いている。

相談支援事業所や児童通所支援事業のくれよんとめるくる、ぱすてると連携し、短期入所や日中一時などと地域で暮らす子どもたちの受入れも変わらず行っている。「地域支援」は専門性の還元である。

これらは、これから進むべく入所施設の在り方として示されている機能そのものでもある。

生活を支援する施設が故に、大なり小なりのことは、おのずと日々あるが、コロナ禍の中、スマートフォンで自信を持ちながら、日々、子どもたちは成長を

している。

そして何よりも、平均年齢三三歳からなる三四名の職員集団は、直接・間接的支援に関わらず、それぞれの部門で相談やフォローを出来る組織体制も整え、情報の共有とそれぞれの「責任」を意識して取り組んでいる。

「色々な仕組みが回りはじめていくと、子どもたちが安定し、現場が成功している」。副園長が、折りに触れて職員に対して力説しているのが目に浮かぶ。

何をもって正解やベストというものは無いが、紡いだ言葉は、子どもたちだけに限らず、どの職員にも当てはまるものでもあったのだ。

生きづらさを抱えて生活するに至った子どもたちを目の前にするからこそ意味を持つ。

言葉のおもみ、言葉のちから。

「子ども家庭福祉を展開していくうえでもっとも重要なのは、その理念であり原理である」。

今年2月に最終報告された「障害児入所施設における在り方に関する検討会」で、座長を務められた淑徳大学の柏女霊峰先生の論文の中にある言葉である。

実践を方向付けていく理念や思想、哲学は「価値」とも称される。かけ離れると独り善がりな支援や場当たりのにもなってしまう。

社会福祉士として職能団体に所属しているが「価値」は「知識」「技術」ともに、実践の共通基盤としてソーシヤルワー

カーの第一義とも言われている。まさに大きな柱なのである。

想いが実践となり、そして理念となり価値となっていく…。おこがましいかもしれないが、紡いだ言葉は、ひまわり学園の「価値」の一つとしてなろうとしているのかもしれない。

*

執筆している中で、「愛」という言葉が頭をよぎった。

日本人にとって「愛は誤解されやすい」とも言われるが、人間を愛するということは「互いに分かち合い、助け合い、敬い、慈しむこと」。「想像するちからを駆使して相手を理解し、心に愛を育むように人間は進化してきた」という霊長類研究者の本を読んだことがある。

子どもに最大の関心を寄せ、そこにある可能性を信じ、安心と信頼の絆が生み出れる。そして、子ども自身が変化を生み出し、自己実現していく…。

そこには、愛も欠かせないのだ。

誰しもが予想できなかったこの一年が、間もなく終わろうとしている。

「価値」や「愛」と抽象的にもなってしまうが、この言葉で締めくくりたい。

最も悲惨な貧困とは、
孤独であり、
愛されていないと感じることです

マザー・テレサ

楽しく過ごす力は

素晴らしい

くれよん・めるくる

今年、コロナ禍での活動となり、調理活動の自粛や、マスクを付け、人との距離を気を付けながら過ごすことが余儀なくされました。感覚の過敏な子は、マスクが苦手なため、マスクをしていないことを指摘され、辛い気持ちになることもありました。

もともと人との距離間が苦手な子にとっては、みんなで気を付ける場となり、支援スタッフとしては良い機会になったとプラスに捉えることもできました。調理活動は中止になり、子どもたちにとって楽しみな活動なため、我慢を強いられることになりました。

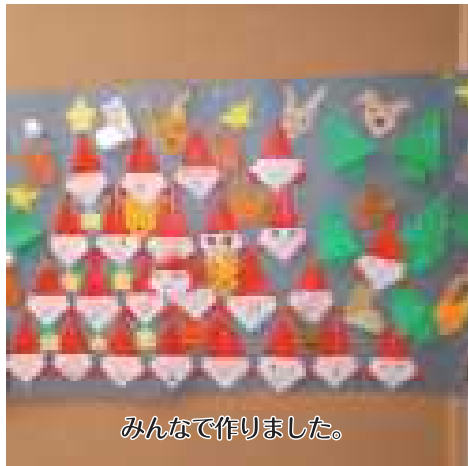
しかし、子どもは柔軟で、このご時勢の流れにもうまく対応していることに感銘を受けることも多くありました。これができるのなら「これをしよう」「あれをしよう」と、どんどん別なアイデアを出しながら遊びが始まります。

家に帰ると動画やゲームなどの電子機器に夢中な子が多いのが普通なこの時代ですが、近くに電子機器がなくても素晴らしい発想力で遊びを繰り広げる力を発揮しています。

一人一人の思いに耳を傾け状況説明をしながら、お友達との上手な関わり方を

丁寧に伝え、次はこうしようを伝えることで、仲良く過ごす時間が増えてきます。素晴らしい発想力と仲良く遊ぶ力が合わさると、コロナ禍であることなど忘れてしまいうくらい楽しい時間となっています。

楽しく過ごすことを第一に考えながら、人との上手な関わり方やルールを伝え、その子らしく成長できるようにこれからくれよん・めるくるは子どもたちの成長のお手伝いをさせていただきたいと思っています。



もう いったかい

ゆうべつこどもスペース

ぱすてる 山口 香織

少し長い秋が、たくさんさんの枯葉を図書館前に集合させています。リラ街道のリラも、もういつかい〴〵緑の葉をつけて、小さな花を咲かせていました。

春には何もおしゃべりができなかつた

子どもたちも、もういつかい〴〵と要求したり、秋にはたくさんさんの言葉シャワーを浴びてお話ができるようになったり、たくさんさんの表情を見せてくれて、なかなかほっこり、心がほんわかする毎日がここにあります。

保護者さんたちも、お出かけのできない週末に少し慣れてきたのか、家で〇〇をして楽しんでいきます。という報告が週明けには多く聞かれています。

職員はどんな状況になっても笑顔で、子どもたちを受け入れて、どんなときでも「ありがと」が伝えられるように日々子どもたちと向き合っています。

小学6年生は、修学旅行が終わり、楽しい思い出がまた一つ増えました。

1年生は学校が始まって何となく『通う楽しさ』を知り、仲間を意識できるようになり、2年生は言葉の大切さがわかり、丁寧に話ができるようになりました。

3年生は低学年ではない自分、高学年には逆らえない環境を学び、4年生はスポーツクラブでも主力選手となり、5年生は難しくなる学習と闘いながら、もういつかい〴〵考えながら宿題を頑張っています。6年生は最高学年としての役割がたくさんさんになる。もういつかい〴〵修学旅行に行きたいね。などと語り合う、そんな秋を迎えています。

湧別の町では、牛たちも枯れた草を食べて、牛乳に、もういつかい〴〵生まれ変わらせたり、海では鮭が子どもを大量に、いくらとして、もういつかい〴〵出

荷されたり、玉ねぎや、カボチャも、もういつかい〴〵時間をかけて熟成されたりしています。

楽しみにしていた町のイベントはほとんどなくなりましたが、ぱすてるでは毎日が楽しく学べる場所であるように、知恵とアイデアで療育の一翼を担う毎日です。

窮屈なマスクも、慣れない手の消毒も、体温を毎日測りながら利用することもきちんとルールを理解して実行できる子どもたちがとても誇らしいです。

来年から学校に向かう年長児は、優しい気持ちと、かけてあげる言葉を結び付けて周りに対する思いやりを覚えてくれます。

支援されてばかりではなく、

「僕が、まもってあげるよ」

という言葉がすぐに出てくる最高に素敵な子どもたちです。

何はともあれ、こんな大変な時代になり、コロナウイルスという見えない敵と戦うために、自分たちができることすべて、感染しないために、させないために、守りたい、誰かのために頑張ろう、という気持ちがあるということが、毎日の活力になっていることを堂々と語る私たちです。

自分だけではできません。助けたり、助けられたりしながら、学びあっていきたいと願っています。

皆様の力と支えが、もういつかい〴〵この危機を乗り越える力になりそうです。

よみがえった笑顔

向陽園サービスマネジメント責任者

高橋 梓

寒さが強まり、朝晩は体の芯まで冷えるような季節となりました。また外も少しずつ雪景色が広がってきて利用者ともども冬の到来を感じているこの頃です。

世間ではコロナウイルスが収まる様相を見せず、感染状況が拡大しています。この春、コロナウイルスのクラスターを体験した向陽園としては、園に再度感染が広がらないよう、正しく恐れて対策を講じながら日々を過ごしています。

コロナウイルスのクラスターが終息した六月中旬に、今後のことについて話し合いました。向陽園のサービスの提供指針としては、

「コロナだからといってすべてをやめるのではなく、今までとあまり変わらない生活を、工夫しながら利用者に提供していく」と決め、現在取り組んでいるところです。

コロナウイルスが終息してから、利用者からの要望が多くあったのは外出と帰省でした。

それもそのはずで、向陽園では、北

海道でコロナが発生した二月頃から、予防の一環として外出は散髪と少しの買い物だけに留めさせてもらい、帰省等は、全家庭について、帰省・外出を取りやめていたのです。

当時は、コロナに対して何を恐れてよいかかわからず、まずは他者との接点を減らすといった対策しかありませんでした。

そのような対策をしていた矢先に向陽園にコロナウイルスが広まり、外出はおろか向陽園の敷地から出ることもはばかれる日々が続きました。

その間、保護者の皆様には多くのご心配をおかけしていたと思いますが、利用者の方々の皆さんもなおのこと不安に駆られていたのではないかと思います。

どこにも出掛けられず、園内の廊下が区切られていて自由に行き来できず、今までの自由な生活が突然として奪われてしまったのですから、利用者の方々の皆さんにとっては多大なストレスとなっていたと思います。

そのような状況を乗り越え、ようやく出掛けられたのが七月になってからです。外出をするにあたっては、

- ① その地域の感染状況がそれほど広がっていないこと
- ② 一般的な感染予防対策（マスク、消毒）をきちんとする。
- ③ 外食は出来ればテイクアウト。店内で食べる場合は感染対策が整っているお店を選ぶ。

と三つの条件をきめて外出を実施し

ました。私たちが外出する際の基準と多くは違わないと思います。

それでもまだ注意をしていく必要もあり、遠軽町近郊だけの外出に留めさせてもらっていますが、出掛けた利用者の方々は、自分で選んで買い物したり、弁当を購入してピクニックしたりするなどたいへんいいことですが、ストレスの発散となったようで、出掛ける機会が増えたころより利用者の様子も落ち着いてきたように感じます。

「たまに出掛ける」といったこと。これほど大切に感じていたかを再認識しましたし、コロナ禍となった現状では、その「普通」を提供することがどれほど困難かも改めて感じています。

帰省についても同様です。家族が家族と一緒に過ごす、顔を会わせて話すといった「普通」の出来事がこれほどまでに難しく、悩ましくもあるのかと、今も痛感しています。

帰省を実施してもらうためにはどのような工夫をしたらよいのかは、職員間の話し合いの中でもなかなか答えが出ませんでした。

これは施設といった集団生活であることが余計に難しくさせており、前述に書いたとおり、二月から帰省と面会の自粛のお願いをしていた状況のなか、コロナウイルスのクラスターを直接的ではなく、遠くから見守ることしかできなかつた保護者の心情を察すると、

他の高齢者施設が行っているテレビ電話ではなく、面会や帰省は可能な範囲で実施させてあげたいということになりました。

今年度の保護者同伴の行事については中止させていただきましたが、面会と帰省についてはルールを設けて実施していくこととし、感染が広がらない状況のうちは継続していくこととしました。帰省や面会にて様子を確認出来てお互いにホッとした様子が見受けられ、実施に踏み切ってよかつたと感じています。

その一方で、「もし、コロナウイルスを向陽園に入ってしまったら」と

と思い、帰省や面会をためらう保護者もいました。どちらが良い悪いではなく、今の状況下ではどちらも正解で、保護者は日々悩まれているのだと感じています。



みんな元気になったよ
(しらかばの仲間と工藤施設長)

そのような家庭にこちらから何かできないのかと考え、保護者の了承のもと、自宅や実家の近くの飲食店などで食事や面会を行うといったことを実施しました。実家での面会ということもあり気兼ねなく過ごすことができてよかったですといった声も聞かれ、これからの新生活様式の一つの形なのかもと感じることとなりました。

このほかにも日常的な消毒など感染予防を行ったうえで様々な活動を行いながら、少しでも「普通」の生活と感じてもらえるように毎日を提供しています。

「普通」を過ごすことが難しくなったこの一年ではありますが、また前のような生活に戻れるようになることを祈りつつ、これからも笑顔で皆さんが楽しく過ごすことができるようにという願いも込めまして、一枚の写真を掲載します。

笑顔は最大の免疫だといわれています。希望をもって明るい気持ちで、これからもよろしく願っています。

コロナ禍の中で開催する

行事の意味とは

向陽園生活支援員 櫻井友幸

六月には向陽園のコロナウイルス集団感染が終息。散歩や外出などを七月から再開し、コロナとの共存を意識しながらも、今までと変わらない生活を送り始めていた頃。

少しずつ園内でも行事に関しての話題が上がり始めていた。八月には盆踊りや花火大会、九月には敬老会、もう一つ「運動会」や「クリスマス会」と並ぶ一大行事の「向陽園等家族交流会」が予定されていた。

大きな行事は二か月前に会議を開催して会議までに土台となる案を担当職員が作成しなければいけなかった。

「向陽園等家族交流会」は向陽園だけではなく、他事業所やご家族様も参加する大規模な行事であり、同様に外部との交流がある六月の「運動会」は中止となっていた。

主担当であった私は、まず工藤施設長の所に行き

「行事は今まで通りにするのですか？」

と確認する事から始まった。

「行事は利用者の楽しみでもあるから、開催したいので、開催する方法を検討して欲しい」

との施設長の返答だった。

私は交流会担当の職員三人と共に、時間を作って事前の話し合いをした。

「コロナ禍の中で、大々的に行事を開催するのはどうなのか。」「地域の方達はどう思うのだろうか」と考えた。

現在の社会情勢や向陽園の立場を考えた時、私は「今まで通りの開催は難しいと思う。向陽園利用者のみで開催しましょう。」と提案。内容も大幅に変更し、徹底したコロナ対策を意識した案を会議前に施設長へ報告した。

八月に開催した一回目の会議で、施設長から方針が発表され、「外部との関わりはなし、向陽園のみで開催する」との事であった。そこで会議中に方向転換し、行事名の変更。そして内容の検討をする事となった。

今まで利用者が楽しみにしていた行事の代わりとなるものを考える際に何が良いのか考えていた。会食も現状安全に提供するのは困難かと思い、午後からの開催に変更。おやつを提供するというスタイルへの変更を提案。その他にはレクリエーションや輪投げ、宝引きはどうするのかという話も上がった。

私は担当職員と話し合いの中で上がった「お祭りの様なものをしてはどうか」という話を思い出し、「地域でのお祭りも今年は中止となっている。利用者さんの楽しみという意味で露店を用意して秋祭りとして行事を開催してはどうか」と提案。行事名も「向陽園秋祭り」に決定し、動き出す事となった。十月に予定していた「おもしろ体験会」も、秋祭りの一角として合同に行う事が決定し、内容もパワーアップしていた。

案を考える際に祭りをイメージして「露店が並んでいて、色々食べたり、遊んだりして楽しむもの」と頭に浮かんだ。ヨーヨー釣りや綿あめなどの露店をテント内に再現してグラウンドに設置して祭り会場の雰囲気を楽しんでもらい

たいと考えた。案ができてからは、職員や利用者にも協力を仰ぎ、露店看板作りや食べ物の準備など、向陽園全体で「秋祭り」を作り上げていった。



浴衣姿がすてき



夏祭り・準備OK

迎えた当日、残念ながら天候は雨で、グラウンドでの開催はできなかった。野外のサンサンドームと園内の活動室を開放し、看板等を設置して各露店のブースを作成した。宝引きを楽しんだり、美味しいフライドポテトを食べたり、一部職員や利用者は浴衣や甚平